

---

# 囚われた天使

淡雪ぼたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

囚われた天使

### 【Nコード】

N5126T

### 【作者名】

淡雪ぼたん

### 【あらすじ】

名ばかりの父親の命令で、大企業の若き社長 花京院 かきょういん 空也の元へと嫁がされた真澄。 空也は妻として迎えると口では言っているが、婚姻届も出さず、愛人として迎えたのだと真澄は思った。そしていつか飽きられたら捨てられるのだと悟った……。 《携帯小説サイトフォレストにて、登場人物は同じ&タイトルと作者名は別名もうひとつのペンネーム）でUPしてましたが、手直ししてこちらにお引越しました。》

## 第1話 悲しみの蜜月（前編）

蓼科の広大な私有地にはこんもり茂った森が生い茂り、重厚な先が槍状のクラツシツクなデザインの鉄製の高いフェンスに囲まれ、外からは様子が見えない。

その広大な森には、大柄な番犬のグレートデンが十数頭放されて、セキュリティーも万全だ。

その先に又フェンスでグルリと囲まれ私邸がある。

外からは分からないがフェンスは外、内と、二重に張り巡らされており、その間の森に番犬が放たれてる。

内フェンス中の広大な土地には、広い人工湖があり、その湖には土地の中からこんこんと湧く澄んだ水が小川となり、その湖に流れ込んでおり、澄んだ水の色は、何とも言えない美しい青のグラデーシヨンで輝いている。

他には美しい四季折々の花が咲き誇る、洋風庭園があり、庭には白いブランコや、人造大理石製の噴水があり、庭園の端には、小さな石造りの心地良さそうなガーデンハウスが建っている。

そして、住まいである大きなルネッサンス調の古い洋館が凜と佇んでいる。

工藤真澄は、今日から夫になる 花京院空也（かきょういんくうや）の 秘書でもある、織部広樹と共に黒塗りリムジンのベンツに乗って、ここにやって来た。

真澄の顔は青ざめて、精気のない憂鬱な表情だ。

と言うのも、父親の経営する会社が莫大な負債を抱え倒産しかかり、その状況を救ったのが、やり手の実業家であり、今日から夫になる花京院 空也と言う男だ。

真澄はこの数日間の、目まぐるしい展開をおさらいするかのようになり、ひとつひとつ頭の中で整理していた。

父親の借金の肩代わりとしてにここに嫁いできたが、その父からは親らしいことをして貰った記憶はない。

真澄の母は、美しく清らかで優しく、凜とした人だ。

その母が、工藤家に家政婦として働いていた時に、その家の放蕩息子だった、血だけのつながりの父親が、無理矢理手込めにして、産まれてきた子が真澄である。

母親が妊娠したのを知った途端に、血のつながりだけの父親の両親は、母を工藤家から追い出した。

一銭もよこさずに、まるで捨て猫のように……。

憎き男の子供である真澄を、心優しい母親はとても可愛がった。

真澄が幼稚園になるまで母は女手ひとつで懸命に育ててくれた。

その後真澄の母は、広い心で愛し、支え続けてくれる優しい人と結婚し、真澄の養父となったその人は、実の子でもない真澄を自分の子として大切に育ててくれた。

養父はとても優しい素晴らしい人だった……。

その養父は、真澄が高校2年の時にひき逃げ事故に遭い帰らぬ人となった。

その後は、母が父親の経営していた花屋を、女手ひとつで切り盛りし、頑張ってきた……。

その母が、癌を患い、末期の状況で今、痛み緩和ケア専門のホスピスにいます。

この病院は医療設備と環境の充実した病院で、医療費は通常より割高なグレードの高い病院だ。

だが、愛する母には痛みが少ない、穏やかな余生を送って欲しい．．．更に、もし良い薬が見つければ、すぐに治療が受けられるようにと思い、身を粉にして頑張って働いてきた。

だが、高額な病院代は働いても働いても追いつかず、とても払えない状況まで来てしまった．．．。

そんな真澄の弱みにつけ込んだのが、あの名ばかりの父だった。その卑劣さにはあきれ返るぐらいだった。

今まで認知もせず、養育費も払わず、全くの赤の他人だったのに、自分の会社が高額な負債を抱え倒産寸前となった途端に手の平を返す様に、真澄に接近してきた。

そして母親の事を知った途端に、母親の医療費の面倒は全て責任を持って見るからと、認知書同意を迫った。

真澄は21歳で成人しているので、相手が認知すると言っても、本人の同意が必要になる。

こんな男の娘にはなりたくなかったが、母親の為、同意書に署名した。

そしてすぐに、実父の家に呼ばれ、美しい振り袖を着せられ、訳も分からない状況で、花京院 空也 と見合いをさせられた。

見合いと言うよりも、品定めと言ったほうが当てはまるかもしれない。

でっぷりと太った実父が、ニヤニヤと愛想笑いを浮かべて、手揉みでもするかのように腰を低くし、空也に言った。

「花京院様、うちの家内には子供がいませんが、この子は外で生ませた娘です。なかなかの器量でしょう。いかがですか？」

花京院 空也は、35歳の若き青年実業家で、体格が良く、背も高く、豊かな少し天然のウェーブのかかった黒髪に、矯正な顔立ちで、女性には不自由しない雰囲気だった。

眼光鋭く、睨まれたら身震いしそうな威圧感がある。

「ふふん。工藤さんには似てらっしゃらないようですが．．．。本当に娘なんですか？」

「ええ間違いありません。必要でしたら書類も用意してお見せいたしますが．．．更にDNA鑑定もご希望でしたら．．．。」

空也に睨まれて、真澄はへびに睨まれたカエル状態だった。

「キャッ！」

いきなり空也の手が伸びて、顎を手でグイと上げられて、あの鋭い眼光で繁々と見られ、思わず悲鳴を上げる。

「ふふん。まあいいでしょう。工藤さんがそこまで言うのなら、娘に間違いはないでしょう．．．。書類の方は結構です。で、いつこの子を？」

「いつでも．．．。花京院様のご都合の宜しい日で．．．。」

そして、私はそのまま蓼科の屋敷に連れて来られた。

一応工藤の父には、妻として迎えると伝えたようだが、婚姻届も書いてない．．．。

工藤の方も、「花京院様のお好きな様に・・・」と、意味深な不気味な事を言った。

きつと、私は愛人として売られたのだ。暫く自分の傍に起き、遊び飽きたら捨てるに違いない。

花京院さんは、やり残した仕事があると言う事で、今日は私と秘書の織部さんとここにやって来た。

とり合えず今日は、花京院さんはここには来ないみたいでホッとする。

大きくて豪華な屋敷には、品良く優しそうな雰囲気のある50代男性の執事と、メイドが数人・・・。

屋敷の人が私の事を『奥様』と呼ぶので、あの人の妻になったのになつてふと思う・・・。

夕食を終えて、今日から私の部屋だと言う部屋に戻った。

20畳ぐらいの広い部屋に、重厚感ある調度品の数々・・・。

美しいマホガニーのドレッサー・・・。

その隣に又広い部屋・・・夫婦の寝室があった。

大きな天蓋付きの豪華な木彫りの装飾のついた広いベッド・・・。

高そうなファブリックとふかふかの高級羽毛の寝具・・・。

ここであの人といつか一緒に寝るの？ と思つたら、身震いがした。

メイドさんが用意した美しい刺し刺繍の入った、シルクのキャミソールタイプのネグリジェは、着慣れなくて落ち着かない・・・。

この広いベッドも、私には身分不相応な感じと言うか、寝心地が悪い・・・。

母さんはどうしているだろう．．．。  
ここに来る時私物は全て没収されて、携帯ひとつない．．．。  
電話も出来ない．．．。  
きつと心配してるだろうな．．．。  
痛みの方は大丈夫かな．．．。会いたい母さんに．．．。  
母の事を思うと、自然に涙が浮かび上がってくる。

そんなセンチメンタルな気持ちの時だった．．．。  
扉がいきなりガチャリと開き ビクツとした。

「だれ？」と言って見たら、そこに空也さんが立っていた。

(第2話につづく)

## 第2話 悲しみの蜜月（後編）

ガチャリとドアが空いて、ここにはいるはずのない空也がいきなり入って来たので飛び上がった。

「なんで？」

「何ではないだろう．．．夫が帰ってきたのに．．．」  
ニヤリと意地悪そうな顔で笑う空也。

「だって．．．今日は仕事があるからって．．．」

「仕事を終えて、自家用へりで帰って来たところだよ。今日は素敵な花嫁を迎えた初めての夜だからね」

そう言って、シャワーしたばかりの素肌にガウン姿の空也は、ベッドに滑り込んできた。

突然の事に、驚いて声も出ない真澄。

まさか自家用へりで戻ってくるとは思いもよらなかった．．．。  
すっかり気持ちは油断してる状態だったので、思いがけない人物が目の前に現れて、パニック状態で頭の中は真っ白だ．．．。

「まさか、結婚したのに、私と寝所を共にするのは嫌だとは言わないだろうな」

その言葉にハッと我に返った。

そうだ私はお金でここに売られてきたような身だ．．．。選べる権利はない．．．。

「に・逃げたりしません」

「君は身も心も私のものになる．．．私の妻になる覚悟は出来ているのか？」

「はい．．．」

自分自身の決心の気持ちを揺るがせないように、自分に言い聞かせるような気持ちで、空也に真直ぐな目を向け答えた。

「良い返事だ」

そう言つて空也は真澄の上に覆いかぶさつて、その重みで飛び上がつて起き上がった状態の真澄はベッドに倒れ込んだ。

いきなり接吻され、戸惑う真澄．．．。

今まで男性と付き合つた事も、ましてやキスもした事なんてない。どうしていいのかも分からず、ただただ固まつた状態だ。

空也の重みといきなりの接吻に、息苦しくなつて、口から吐息を吐いた途端に空也からもつと深い接吻を落とされた。

\* \* \* \* \*

真澄にとつて結婚はまだまだずつと先の事だと思つていた。

今回のような事がなかつたら、愛する養父と母と同じ仕事．．．花屋の従業員を今も続けていただろう。

意外と重労働だが、花を購入して下さるお客様の笑顔を見るのが楽しく、綺麗なお花や植物に囲まれてるとても幸せで、心満たされる毎日だった．．．まだまだずつと続けてきたかった。

いつか自分の店を持ちたかった．．．。

それから恋を試してみたかった．．．。

心の奥がホンワリと温まるような、その人の事を思っただけで心が弾むような．．．この世の全てが薔薇色に見えるような、幸せと喜びでいっぱいになるような、燃えるような恋をして、愛する人と結婚して．．．。

その人と迎える初めての夜．．．。

もう私の夢は全て消えて幻になってしまったんだ．．．。

こんな大企業のトップのような立派な人なら、自分に釣り合う良い家柄の美しく教養も高い素晴らしい花嫁候補が引く手あまただろう．．．。

真澄は妻として迎えると言つこの言葉を信じられない気持ちだった。

．．．きつといつか私は飽きられて捨てられる．．．。

初めて会った時には威圧感にあふれ、すごく恐ろしい人に見えたが、今は別人のように優しい眼差しで、初めての時も乱暴には扱われなかった。空也の事は嫌いじゃないと思った．．．かと言ってまだ出会ってほんのわずか、好きと言う感情にはいたってないが．．．嫌いではないし、この男の腕に抱かれる時には、嫌で嫌で苦痛で辛く悲しみに心が満ちあふれるだろうと思ったが．．．そうではなかった。

初めて接吻を落とされた時には心がドキドキと高鳴った．．．。  
何故なのかは分からない．．．。

．．．ただ．．．今はいつか捨てられると思うと悲しい．．．。  
そしてお金で自分の身を売った身、もし捨てられてももう誰とも恋は出来ないし結婚も出来ないと思った。  
空也に背を向けて、あれこれ思いを巡らせていたら自然と目から涙がこぼれた。

そんな時、いきなり空也にグイと引き寄せられて、彼の方に向かされて目と目が合った……。

泣き顔を見られて、それをみた空也が驚いた顔をした。

「泣いてるね。そんなに辛かったのかい？ 私の妻になるのがそんなに嫌だったのか？」

「い……いいえ」

「じゃあなんで泣いてるんだ？話してごらん」

空也が真澄の顔を優しく手で挟み、顔を近づけてきた。

「いつかは飽きられて捨てられると思ったら、ちょっと悲しくなりました」

「何言ってるんだ、妻にすると聞いたじゃないか？ 私から離婚はしないよ」

「でも、婚姻届も出してませんし、私はお金で買われた愛人なのでありませんか？」

「君の父には多額の融資をしたが、君を愛人にするつもりで金で買ったつもりはないよ。私は、真澄を妻として迎えたんだ。婚姻届は時期が来たら出す予定だ。その時に結婚式も挙げるつもりだよ。ただ、もう暫くは待つて欲しい。」

「どうして私を？」

「一目見て気に入ったから……。詳しい事はいずれ話すよ。私を信じて欲しい……。」

彼の言う時期とは一体何なのだろう？ この人を信じていいのだろうか？

不安は色々あるけれど悪い人ではなさそう．．．。  
あの名ばかりの父より全然信じられるかもしれない．．．。

どの道借金の形にここにやって来たのだ、私には選択の余地は無い．．．。  
それにもう、この人の物になってしまったのだから．．．。

その時、空也にいきなり手を掴まれて、驚いた。

「え？」

「手が随分荒れてるね」

母の医療費の為に、食事もあり摂らずに働きづくめだったから、手も肌も荒れて痛んでるかもしれない．．．。

「かしてごらん」

サイドテーブルの引き出しからハンドクリームを出し、彼が付けて優しくマッサージしてくれた。

その後ふんわりと抱きしめられて「愛してる」と言われ、彼はそつとくちびるにキスしてきた。

『愛してる』と言われて、この人の口からそんな言葉が飛び出すなんて！！意外な感じがした。

そんなに優しくされると、心がドキマギと震えてしまう．．．。  
初めて会った時には、心を何処かに置き忘れたような、冷徹で非道な雰囲気の人のように見えたのに．．．。今日の前にいる人は、温かく優しく包んでくれる人．．．。これが本当の姿なの？

散々な悲しい一夜となるだろうと思っていたのに・・・。心にほんのりと希望と言う灯火が灯った。  
私の事、愛してると言ってくれださった・・・。  
大切にしてくれそう・・・。

空也の大きな腕と、温かい体温に包まれながら、心地よい眠りが襲ってきて眠りについた。

(第3話に続く)

### 第3話 疑心暗鬼と猜疑心（前編）

あれから1週間が過ぎた。

屋敷の執事やメイドからは『奥様』と傳づかれ、何不自由なく身の回りの世話を焼かれ、空也からは毎晩深く愛されて、大切に優しくされて、高価な贈り物を色々貰って．．．。幸せのはずだが、真澄の心の中は晴れない。

外出は許されないし、真澄の私物はどこかに無くなり、携帯もかけられないし、この家の電話は何故か直通でかける事が出来なくて、外線に一切取り次いで貰えない．．．。

一見快適そうなこの環境だが、どんなに大事にされても、チャホヤされても、結局彼の愛人で、籠の鳥なんだという事を悟った．．．。『妻』『奥様』と言う名前の愛人．．．。

自然豊かな広大な土地に何不自由ない環境のここは牢獄だ．．．。

．．．昨夜、夢を見た。

苦しそうな辛そうな母の顔．．．自分に会いたがっている悲しそうな母の顔．．．。

自分に背を向けて、暗い闇に向って歩いて行く母の後ろ姿．．．一生懸命引き止めようと追いかけたが、見失ってしまった。何か嫌な予感がした．．．。

母の事がとても心配で気になるのに．．．。外に出れない．．．。空也からプレゼントされた高価そうな宝石類．．．。これを持って、買い取りショップに持っていけばお金になるかも．．．。でもこんな山奥の蓼科のどこにそんなショップがあるの？

一銭もお金を持ってないから、もしここを抜け出しても、母の居る

病院まで行く事が出来ない。

空也さんにもう一度外出のお願いをして、聞いてくれなかったら、強行突破しかない．．．。

あとで捕まえられてもいいから、せめて一目母を見たい。

真澄は深く思い詰めていた。

．．．そうだ、あのベンツを奪って．．．。

この家には数台のベンツや外車があった。

もちろんナビもついているだろうし、お金は持ってないから、料金のかかる高速は使えないが、一般道から行けば．．．。何とか母の病院までたどり着けないだろうか？

あるいは、町まで行けば、買い取りショップがあつて、宝石類を現金に替えて、電車に乗って．．．。

．．．真澄の中でだんだん計画が出来上がって行った。

この屋敷は2重にフェンスが張り巡らされて、ご丁寧にフェンスとフェンスの間には、大型犬が放たれて居る。容易には脱出できない．．．。

頑丈なベンツだったら、車で体当たりして門を突破出来るかもしれない．．．。

．．．空也が外出の時を見計らって．．．。

でも車のキーは？

朝の出勤時、空也がへりに乗る時、車は玄関エントランスに待機されて、その車に乗り、敷地内のへりポートまで行く。

運転手はエンジンをかけたままで、空也が乗り降りする時、ドアを

開け締めする為一旦車から降りる．．．。

．．．その僅かな時間、車を奪うしかない。

こんな大それた事をやるのは恐ろしいしやりたくないが、母の事が気になってその事で頭の中はいっぱいいっぱいになって、少しノイローゼの様にもなっていた。

最後の御願いと思って、空也に外出したいと話したら、やはりダメだと言われた．．．。

\* \* \* \* \*

その翌日の朝、真澄は空也を見送るふりをして一緒に玄関エントランスまでついていった。

運転手はエンジンをかけたまま、ドアを開け閉めする為に車を降りた。

『いまだ！！』

そう思つて、真澄は全速力で車に駆け寄り物凄い勢いで車に乗り込んだ。

シートベルトをしている余裕はない．．．。

急発進して門に向つて車を走らせた。

空也の大変驚く顔がバックミラー越しに見えた。皆驚いてる様子が見える。

なんて大それた事を．．．。

真澄自身、自分のとつた行動に驚くような戸惑つような気持ちもあったが、もう後もどりは出来ない．．．。

門に突っ込む時のために途中車を止めてシートベルトをカチリとはめた。

バックミラーに追っ手の外車が接近してくるのが見える。

慌ててアクセルを目一杯踏み込んで門に突っ込む体勢をとった。

心臓が凍りつく一瞬。

物凄い衝撃音と共に、物凄い衝撃が来て窓ガラスもヒビが入って割れた。

門が吹き飛んだのが見えた。

額と右手に激痛が走る。先程の衝撃は物凄かった。

こここの家の門は剛健に出来てるようだ……。

犬が放されている森ゾーンに入ったが、あの衝撃音に犬がおびえたのか姿は見えなかった。

次の門は物凄く剛健で、破壊出来るかどうか微妙な感じだった。

大それた事をしでかし、興奮状態で真澄は完全に理性を失ってる状態だった。

こうなったら、やるしかない……もう引き返せない。

アクセルを全開に踏み込んで接近したら、門がオープンし始めてギリギリぶつからずに通る事が出来た。

車が接近したら開くようなシステムなのだろうか？

難なく通過出来てホッとしたが、すぐに追っ手が迫っている事に気がついた。

運転しているのは空也……。

お見合いの席で、初めて会った時に見た、あの冷たそうな表情をしていた。

顔が完全に怒っている。その顔を見たら、ゾクツと恐怖の感情が沸

き起こった。

白の外車に乗って鮮やかな運転さばきであったという間に回り込まれて、何度か側面から体当たりされて、真澄の車は空也の車とガードレールに挟まれて、身動きが取れなくなった。車から降りて、『バーン！』と怒りをぶつけるようにドアを閉めて大股でこちらに向って歩いてきた。

『怖い．．．』

「あけなさい！！」

空也の気迫に圧倒されて、シュンとして車から降りた。

「なんて事するんだ」

「だって．．．。外に出してくれないから．．．」

「私を嫌って逃げようとしたのか？」

「そうじゃないです」

「そうはさせない！」

腕をガシリと捕まれて、もう一台やって来た迎えの車に放り込まれた。

屋敷に戻ると、そのままズルズルと寝室に連れて行かれて、ポーンとベッドの上にほつり投げられた。

「お仕置きだ！」

今まで見た事も無い怖い顔に身が縮む．．．。

「服を脱いで裸になれ!!」

「えっ!!」

(第4話に続く)

#### 第4話 疑心暗鬼と猜疑心（後編）

「服を脱いで裸になれ!!」

「えっ?!」

「自分の耳を疑った...」

『今のは本心？ 脅しをかける為に口から出た虚言ですよね？』  
とても驚いた顔で空也の心の中を読み取ろうと、ジッと見つめた。  
今までに見た事も無い恐ろしい形相の空也...」

「はやくしろ!!」

おずおずと脅えながら服のボタンに手をかけ、脱ぎ始めた。  
さつき痛めた手がジンジンする。

「お願いです。乱暴はしないでください...」  
消え入りそうな声で、脅えながら空也に訴えた。

「おまえはキツクお仕置きしないと分からない様だな」

\* \* \* \* \*

それは、とても乱暴な扱いだった...」

彼の元へと行く事になった時に、愛人として酷い扱われ方をされる  
かもしれないと、ある程度の覚悟はして来たつもりだったが、意外  
にも、妻として望まれ、優しく大事にされて、暗闇から一筋の光が  
差し込み、その光は希望へと変わって心の中を明るく照らし、その

光はどんどん広がっていつてる所だった。

だが、今、奈落の底に突き落とされた．．．。

そしてやっぱり自分は、お金で買われた愛人なのだと感じた．．．。

妻にと言われて、その言葉に希望と喜びを見いだしていた自分．．．

なんて馬鹿だったのだろうか．．．。

酷い扱いよりももっと衝撃的だったのは、彼から受けた心をスタズ  
タに裂かれたような言葉だった．．．。

『この売女め！！』

目の前が真っ暗になって、心の中は闇に覆われて何も見えなくなっ  
た。

何も考えられなくなり、何も感じる事が出来ない．．．自分を消し  
去りたいようなそんな気持ちだった。

魂のない人形の様になりたかった．．．。

だけど、ふと突然に優しい母の顔が頭に浮かんで、それと同時に突  
然に大きな絶望と悲しみが押し寄せてきた。

\* \* \* \* \*

忙しい経営者の身、空也はあの後慌ただしく身支度をし直して、へ  
りで東京六本木の本社ビルへと飛び、山のような仕事をこなしてい  
た。

仕事が忙しければ、自分の事を考えている余裕もなく気が紛れる。

だが、夕方近くになって、仕事も片付き余裕が出て来ると、あれこれと今日あった出来事が思い出される。

空也は真澄が自分を嫌って逃げ出そうとして、あんな大それたことをしたのかと思ひ込んでた。

あんなに愛し合ったのに、結局は自分の事を嫌っていたのかと・・・。

最後の門を開かせなかったら、いくらベントツと言えども確実に真澄は死んでいた。

それで更に気が動転してしまった。

とても愛おしいという気持ちと、自分を嫌って逃亡を図ろうとしたその衝撃が交差して、その複雑な気持ちは激しい愛の裏返し of 憎悪となって真澄へと向けられた。

幼い頃に母親に去られて、人を愛する事、愛される事に不得手な空也・・・。

特に、愛するものに去られると言う事は自分の中で、とても堪え難いものだった。

だが、暫く時間が経って、少しずつ冷静さを取り戻して行くと、なんて事をしでかしてしまったのかと後悔と悄然とした気持ちで、心の中がいつぱいになって苦しみと悲しみが溢れ出しそうな状態だった。

心が痛くて痛くてどうにかなくなってしまっそうだった・・・。

経営者として、仕事に関しては冷静で余計な感情も抑えられ、的確な判断も出切るが、真澄に関してだけはそれは別格のものだった。自分でも驚くぐらい、情けないような、その分野に関してはまるで

赤子状態のような．．．。  
大事な大事な宝物を謝って壊してしまったみたいだ。

そして今、真澄に対して懺悔と償いの気持ちでいっぱい状態だった．．．。

\* \* \* \* \*

真澄はと言えば、空也が出て行ってから、嫌な出来事を全て洗い流すように暫くの間シャワールームに籠りきっていた。

逆上せあがってしまったいそうな状態でフラリと出て来て、それから寝巻きに着替えると自室のソファーに横たわった。

髪を乾かす気力も起きないし、とても疲れて立ってられないぐらい憔悴し切っていた。

何も考えずに休みたい．．．。でも、あの嫌な記憶とぬくもりの残る、ベッドルームには行きたくなかった。

(第5話に続く)

## 第5話 硝子の心

物凄くショックを受けてしまった真澄は、その後高熱を出した。部屋に来たメイドが、ソファーに横たわる真澄を見つけベッドルームの方に連れて行こうとしたが、頑として嫌がり、客間のベッドルームのベッドに寝かせた。

花京院家かかりつけの医師が呼ばれ、診察した後で分かったが、真澄は車で門に突っ込んだ衝撃で、腕を怪我し、手首の骨が不全骨折（ひびが入る）していた。また、額も切って怪我をしていた。

執事より報告を受け、空也は益々落ち込んだ・・・。

深夜へりで蓼科に戻って来て、そっと客間のベッドルームに行き、真澄の様子を見に行った。

熱で額には汗が浮かび、苦しそうだ・・・。

右腕のギブスと額の大きな絆創膏が痛々しい・・・。

看病の為に、メイドがベッドサイドに置いていったアンティークワゴンに置かれた、ホーローの洗面器にタオルを浸しギュッと絞って、額の汗をそっと拭いてやった。

こんな事をしてあげるのは、裕福な家庭で何不自由なく育ってきた空也にとっては初めての事だった・・・。

初めて守ってあげたい大切な愛する人が出来たのに・・・愛すること、愛される事を知らない愚かな自分は、そんな人を苦しめて傷つけてしまった。

心が痛すぎて、自然と涙が流れた。

泣くなんて．．．そんな感情は忘れてしまつぐらい遙か昔の事だったような気がする。

その時だった．．．。

「おかあさん．．．」

熱にうなされながら、真澄がつぶやいた．．．。

ポツリと言った寝言でハツとする。

「母親に会いたくてあんな事を．．．」

自分を嫌ってだと思つたが、もしかして母親に会いたいが為に．．．？

\* \* \* \* \*

実は大手企業の敏腕経営者、真澄の事は全て調べ上げられており、お見合いの席で会う時にはすでに事情を知っていた。

真澄の父には、騙されたふりをしていたのだった。

母親の事も全て知っていた．．．。

そして母親はすでに他界している．．．。

大失態だつたと思うが、母親は真澄の父親の悪どい策略により、あのお見合いの日から数日後に、医療費が安く済む、設備も整わない様な酷い病院に転院させられ、元々大分衰弱していた真澄の母親は容体急変して亡くなってしまった。

真澄の母の元々いた病院は、医療費はかかるが設備の非常に整つた良い病院で、真澄が身を粉にして働いて何とか医療費を捻出していた。

食べるものも節約して、最低限の生活をして、必死に．．．。

だが、それでもとても厳しい状況で、泣く泣くあの名ばかりの父親の言う事を聞いて空也の元に来る事になったのに……。  
可愛そうに、無縁仏として何処かに葬られてしまったようで、今空也が必死に捜させている所だ。

また、真澄の父が真澄を誘拐して何処か闇組織に売り飛ばそうとしているような情報も耳にして、警戒していた所だった。

携帯など私物を取り上げて隠したり、外部と連絡ととらせないよう  
に屋敷内の電話の外線を制御させていたのは、純真な真澄が、言葉  
巧みに工藤に呼び出されて誘拐されないように、母親が亡くなって  
遺骸も行方不明という事を隠す為だった。  
守る為に屋敷内から出れないようにさせていた。

空也はと言えば、お見合いの席で出会う以前に真澄の事は知っていた。

名ばかりの父である工藤の策略の餌食になりそうな娘の事を知り、  
興味を持ち、そつと様子を見に、何度か真澄の働いていたフラワー  
ショップに行った事があったのだった。

(第6話に続く)

## 第6話 天使に出会った！

工藤の娘とはどんな子なのか？

秘書の織部に密かに調べさせていたが、提出された報告書の写真を  
見て驚愕した・・・。

工藤とは全く似ても似つかわない、それはまるで天使だった・・・。

・・・私は初めて人間の姿をした天使を見た。

こっそり車から遠目に様子を見に行ってみたが、写真以上に素晴らしい子だった。

明るく健気で、一生懸命のかわいい女の子・・・。

一目見て心を奪われた。

・・・ある日サングラスをかけてその店に行った事が・・・。

「いらっしやませ」

母親の事で苦労して大変なのに、そんな様子は微塵も感じさせない、  
明るくひまわりのような笑顔を自分に向けた真澄。

「あの・・・プレゼント用のアレンジをお願いしたいのだが・・・」  
空也は内心ドキドキしながら誰にもあげる予定のないプレゼント用の  
花を注文した。

「どんな雰囲気の花がいいでしょうか？」

「そうだね。実は片思いの人にプレゼントしたいと思ってるんだが、  
君そっくりな雰囲気の人だね。」

もし君ならどんな花を好むのかな？」

「え？私ですか？」

キョトンと目を丸くしてその顔がまた可愛いと思った。

「参考までに聞きたいだけなんだが・・・」

慌てて弁明のような事を言った。

「参考になるかどうかは分かりませんが、私はロマンティッククレーヌって言う、アンティークタッチのバラが好きなんですけど・・・」  
そう言っただけで、ロマンティッククレーヌを持って来て、空也に見せた。

「これがロマンティッククレーヌです。お姫さまのふわっとしたドレスみたいで、淡いピンクのようなアプリコットのような・・・。この色合いが好きで・・・」

あ、でも、プレゼントされる方のお好みの色合いの花にされたほうが良いと思いますよ」

「いや、彼女もこの花が好きだと思っただけ」

彼女らしい好みだなと感じた。

「じゃあこの花をメインにして、アレンジしましょうか？」

「是非、あなたに任せます」

楽しそうに真澄は手早く花をセレクトして、空也の前に持ってきた。

「この花が合いそうに思うのですが、いかがでしょうか？」

「うーん。いいね。これで是非お願いするよ」

「はい、かしこまりました。あの、その方の年齢はだいたい・・・」

「君と同じぐらいだね」

「はい、分かりました」

とても優しそうな色合いの、とてもセンスのいい素敵なアレンジバ  
スケットが出来上がった。

「うーん、素晴らしいね。これならきつと彼女も喜んでくれると思  
うよ」

「ありがとうございます。あ．．．。もし宜しかったらこの花をど  
うぞ」

そう言つて彼女は、小さな青紫色の鉢花をおまけにつけてくれた。

「ありがとうございます．．．。この花は？」

「これはペンステモンと言う花なんですが．．．。その中のヘブン  
リーブルーと言う品種で、ペンステモンの花言葉は『あなたに見と  
れてます』って言うそうですよ。片思いのその方に思いが届きます  
ように祈ってます」

それが真澄と初めて会話した思い出だった．．．。

あんな清らかで優しい素晴らしい真澄に私は．．．。

ハツと我に返つてガクツと落ち込む空也。

『本当はあのフラワーバスケットは君にあげたかったんだよ』

そして、彼女から貰ったペンステモン・ヘンリーブルーは、洋風庭  
園の石作りのガーデンハウスの脇に植えて、大きく育つてる．．．。  
あれから洋風庭園には、彼女の好きな花ロマンティックレースが沢  
山植えられ、毎年花の季節には美しいレースをまとつたお姫さまの  
ような花々が咲き誇った。

もともと企業買収のターゲットとして、業績の悪いかつ価値のありそうな会社を探していて、真澄の父の経営する会社に白羽の矢が当り、下調べをされていて、真澄の事を知った。

その娘に興味を持ち、色々調べていくうちに魅かれるようになった。

そして真澄の父が真澄に認知同意書の書名を迫り、借金の形に愛人として売り飛ばそうとしている事を知り、何げに話しを持ちかけて、その日のうちに真澄を自分の手の中に保護する気持ちである日連れ帰った。

・・・妻に迎えようと思い・・・。

自分の手の中に入れた愛する彼女・・・。

元々強引な所のある性格・・・。

彼女を手に入れた途端に、欲望を抑えられなくなり、彼女の操を奪ってしまった。

でも、本当に嫌がったら押さえるつもだったが・・・。

抵抗もせず、自分の愛撫に応じてくれた彼女に感動し、喜んで燃え上がってしまった。

彼女も同じ気持ちだと思い込んでいた時にあんな事が起きて、もしあと1歩でも門を開けさせるタイミングが遅かったら帰らぬ人となっていた・・・。

気も動転し、理性は消え去り、気がついた時には・・・。

彼女を誰にも奪われないように、自分から離れられないくらい奪い取って観念させてやると言う気持ちと、この燃えるような愛する気

持ちに気づいて欲しいと強引になってしまった・・・。

力を失い、悲しく辛そうな表情で眠っている真澄からは、あの天使のような可憐さも、ひまわりのように光る輝きも消えていた・・・。

(第7話に続く)

## 第7話 懺悔と戒め

空也は一晩中付き添って看病した。

出来る事と言えば、額の汗をそつと拭いてあげたりと大した事は出来ないが、償いのような気持ちだった。

朝方、目を覚ました真澄と目があつた．．．。

「あ．．．」

まだ熱の残る精気のない瞳だが、空也と目があつた途端、瞳が大きく見開かれて苦悩の表情をしてから、フツと目をそらされた。

「ごめん．．．」

何よりも一番初めに謝りたかつた．．．許される事じゃない事は分かっているが．．．。

「いいんです．．．」

「えっ？」

「お金で買った愛人なんですから、何をしてもあなたの勝手ですから．．．どうぞご自由にお好きにして下さって構いませんから．．．」

恨めしい低い声でボソツと言われた。

．．．明らかに怒ってる．．．。

「あの時言った言葉は、本心じゃないんだ。君を傷つけようとかと酷い言葉を吐いてしまった。私を嫌って逃げようとしたのだと思つて．．．君はお金で買った愛人ではないから．．．心から私の

妻になつて欲しいと願っている。どうか私の元から去らないで欲しい……。

その……もう絶対に酷い事はしないし、君が許してくれるまで、許可してくれるまで、もう二度と求めたりしないから……」

「あの……一人にしていたいただいてもよろしいでしょうか？」

何を言つても、ただうっとおしい存在にしか過ぎない感じだった。

「分かった……後の事はメイドに頼んでおくから。早く良くなつてくれ……」

「すみません。ありがとうございます……」

\* \* \* \* \*

その後、後ろ髪を引かれるような気持ちで、本社に向つた。

家に帰つたら、真澄が居なくなつてはいないか、また具合が悪くなつて苦しんでないか？

まさかとは思つが自殺しようなんて……まさか……でも……あれこれと不安な気持ちが心の中を渦巻いていた。

心は蓼科の屋敷に置いてきたまま、仕事をこなして、一段落したら慌ててへりで屋敷に戻つた。

戻るとすぐに、真澄の居る客間寝室に向つたが、ベッドは蛻けの殻だった。

青くなつて慌てて捜そうと部屋を飛び出した途端、執事と鉢合わせした。

「旦那様。夕方、奥様が居なくなつたので、皆で探し回りました所、洋風庭園のブランコの所に腰かけてらっしゃるのを見つけたのです

が、皆で戻られるようにと声をかけているのですが、言う事を聞いて下さらず・・・」

「わかった」

洋風庭園に行くとナイトウェアにガウンを羽織って、素足で真澄がブランコに腰かけぼんやりと夜空を見上げていた。ギブスをつけている右手が痛々しい・・・。

「真澄、また熱が上がったら大変だから戻ろう・・・」

空也の顔を見て、ビクリと飛び上がる真澄。

苦痛の表情を浮かべ、ブランコのアームに手を添えて、動きたくないそぶりをするので、仕方なく自分の上衣を真澄にかけて、隣に腰かけた。

招かざるものがやって来た風に身を固くして、明らかに警戒している様子が分かる。

すぐく嫌がられたもんだと心がギュツと固まるような、辛く苦しい気持ちになる。

「ごめん、本当に悪かった・・・。何度も言うけれどあの時言った言葉は全部嘘なんだ。本心じゃないんだ。

嫌われて、私から逃げたくてあんな事したのかと逆上して、理性を失ってしまった。

私は本当に真澄の事を心から愛してるし、婚姻届をまだ出さないのは、お前の親父に書かされた、認知同意書を取り戻そうとしているからなんだ」

「えっ？」

最後のその言葉に真澄が物凄く反応した。

「実は真澄の事は事前に調べて全て知ってるんだ。工藤の父親の事を嫌ってるんじゃないか？」

工藤家からじゃなく、認知前の姓の北原真澄で私の所に嫁に来させたいし、認知させてしまうと後々面倒でもあるし……。それにまだ認知書は裁判所に提出されてないし……。」

「えっ？　じゃあまだ私は北原真澄なのですか？」

「そうだよ」

「私の事を色々ご存知なのですか？　私の事、愛人じゃなくて本当に愛してくださってるの？」

「君が花屋に務めてる頃から知ってるし、心魅かれて愛してるから工藤に売られそうになってる君を保護しようと思って、そして妻に迎えたいと思って、あの日すぐに蓼科に連れて来たんだ」

驚きの表情で見つめる真澄の顔……。

青白くやつれてるなとふと思った。

「私の事嫌いかな？」

「初めは借金の形に売り飛ばされたんだって、観念して従わなければって諦めのような、そんな気持ちでした。

でも、優しくしてくださり、私を心から愛してくださるあなたに、魅かれてきました……。でも……。」

「そうだよね。君をとても傷つけてしまったし……嫌われて当然だよ」

「嫌いじゃありませんよ」

「えっ？」

（第8話に続く）

## 第8話 二人の距離

「私の事を嫌いじゃないのか？」

「今日一日考えてました．．．」

「昨晚一晩中付き添って、看病して下さってましたよね？」

朝は気がつきませんでした。後で気がつきました。ずっと誰かが側にいた様な気がして．．．あれは空也さんだったんだと思いました。

恐いって思う時もあるけれど．．．根は優しい方なんだって思います」

「私の事、許してくれるのか？」

「元々私があんな事をしでかしたのが悪かったですから．．．許すも何も．．．もう、本当に怒ってませんから．．．」

「もつと大事にするから．．．私の傍にずっといて欲しい」

「空也さんの事、嫌いじゃありませんが、まだ、自分の気持ちがよく分かりません。」

「だから．．．時間をくれませんか？ 私の立場でこんな事言えた義理じゃありませんが．．．もし許してくれるのなら．．．」

「私はお金で君を買ったのではないから、分かったよ。すごく強引すぎたと今では反省している。」

君の言う通りにするから．．．私の事が嫌いになったり、他に好きな人が居ないのなら、それまでの間ここにいて欲しい．．．私の側に．．．」

君が許可するまではもう、無理矢理自分のものにしようとはしないから．．．好きになってももらえるように努力するよ。気持ちがハッキリしたら、正直に話して欲しい．．．」

「はい」

「冷えてきたし、もう戻ろうか？ 体にも障るし．．．」

「あともう少しだけ、月を見させてください。もう少し見たら戻りますから。」

月は私を愛してくれて育ててくれた北原の父との思い出なんです。父とよく一緒に月や星を観察して．．．。月の綺麗な日にはベランダの椅子に並んで腰かけてあれこれ色々な話を話して．．．。月を見ると心が安らぐんです」

「じゃ君が見終わるまで、一緒にいるよ」

暫くして、おずおずとしながら真澄が聞いてきた。

「あの．．．」

「ん？」

「私は何であんな事をしでかしたのか？何故聞かないのですか？」

「う．．．ん．．．それは．．．」

「あの．．．。母の事知ってるのですよね？」

「あ．．．ああ」

「母は大丈夫なんでしょうか？」

「.....」

どうしたら良いのか言葉が見つからなくて返事が出来ない空也。

「まさか何かあったんじゃない？」

「それは.....」

「やっぱり何かあったのですね。だから連絡もとらせないようにして、私をこの場所に閉じこめて居たのですか？」

「実は.....」

「本当の事を話して下さい」

「お母さんは転院させられて、行方が分からないんだ.....。今、捜してるから.....」

「ええーっ」

口を手で押さえて驚愕する真澄.....。目から大粒の涙が溢れ出した。

「必ず見つけ出すからもう少し待ってて.....」

「今転院なんてしたら母が死んじゃう.....。とても弱ってるのに.....」

気休めにいい加減な事を言ってもいずれ残酷な現実の事を知る時が来るだろう.....。

何て答えていいのか、言葉が浮かんでこなくてただ「必ず捜し出すから・・・」とだけ答えた。

空也の戸惑う表情を真澄は素早く察知した。

「もしかして何か隠してませんか？本当の事を言っして下さい」

「・・・もう隠し切れない!!」

「実は・・・もう・・・」

「全部話して下さい!!」

「すまなかった。凄くショックを受けるだろうと思って、その事は君にどうしても言えなかったんだ」

観念して、空也は自分の知ってる事を全て話した。

「すごく取り乱しはしないかと、真澄の反応が不安だったが、意外にも気丈だった・・・」。

「痛みも酷くて痛み止めも効かなくなってきたり、衰弱も激しくて、先生からもあまり持たないって言われてたし、覚悟はしてました。」

でも、こんな風に逝かせてしまったなんて・・・。

母の医療費を出すからって言うから工藤の言う事を聞いたのに・・・。

苦しまないで痛みが無いように、最後は少しでも楽に送らせたいと思って、良い設備の病院にしたのに。

母の遺骨もこの手で抱けないなんて・・・」

「必ず見つけ出すから」

「お願いします。母を早く見つけてください!!」

「絶対に見つけるから・・・」

「お願いします」

何度も何度も真澄は涙を流しながら、空也に頭を下げ、頼み込んだ。

（第9話に続く）

## 第9話 寄り添う心

- - - あれから1カ月が過ぎた。  
その期間、様々な変化があった。

空也が必死に調査させて、真澄の母らしき遺骨が見つかり、DNA鑑定をして真澄の母親だと判明した。

改めて葬儀を行い、真澄の養父と一緒にお墓に遺骨を納めた。

真澄は遠慮したが、墓石も立派な物に変えた。

自分で出来る最大限の事をしてあげたかった。

認知同意書は工藤に不信感を抱く側近の部下を買収して、取り返す事に成功し、無事破棄する事が出来た。

腹黒く欲深い工藤の事・・・。

認知して自分の不利益になるか？利益になるか？じっくり検討していたようで、幸いにも認知を免れた。

その後、工藤の会社は、企業買収を成功させ、工藤を退陣に追い込み、会社をバラバラに分散して売却してやった！！

勿論社員に罪は無い、路頭に迷わないように十分な救済措置をとった。

あいつ（工藤）は今ごろ路頭に迷って路上生活を送っているかもしれない・・・。

そう思っていた矢先、もつと恐ろしい事が分かった。

工藤の側近の密告により、真澄の養父のひき逃げ事故に、工藤が絡んでいる事が分かった。

真澄を利用して、大金をせしめようと狙っていた工藤・・・。

真澄の養父が邪魔だったようだ。

真澄の養父は本当に我が子の様に真澄を可愛がっていたようだ．．．

工藤はそれ以外にも様々な悪どい事をしていたようで、今は刑務所にいる。

おそらく一生出て来れないか、もしかしたら、一番重い判決を受けるかもしれない．．．。

それから真澄は、工藤とは血が繋がっていなかった。

こっそりDNA鑑定をさせて分かった。

更に色々調べさせて、真澄の母が工藤に手込めにされた頃、結婚を約束した人が居た事が分った。

芸大に通う画学生で、卒業し、生活の基盤が出来たら結婚する約束をしていたらしい．．．。

工藤との事があって、真澄の母はその恋人に別れを告げ、彼の元を去った。

その恋人は海外に旅立ち、そのまま海外で活躍しているようだ。

未だに独身らしい．．．。おそらく真澄の母を、今でも愛してるのだろう．．．。

おそらくその人が父親だ．．．。

報告書の写真を見てすぐに分かった。

何処か真澄と面影が似てる．．．。

そして決定的だったのは、その人の名前は『真澄』だった。

真澄の母は、恋人の子供を妊娠していると工藤に知られたら、何をしてくるか分からない危険を感じていた．．．。

どんな事しても子を守らなくてはならない．．．。

『だから工藤の子として育てて来たのだろう．．．』

これらの事実は真澄には話して無い。

いつかその時が来たら、話そうと思うが．．．。

色々な事がありすぎた今はまだ伏せておこうと思ってる。

めでたし めでたし といきたい所だが．．．。

まだまだ問題が．．．。

それはこれからの2人の事だ．．．。

あれから別の部屋で、距離を置いて互いに生活している。

もう同じ過ちを犯して、真澄を恐がらせたり、嫌われでもしたら一大事と細心の注意を払って、気を使っている。

「真澄．．．その．．．洋風庭園にでも散歩に行かないか？」

空也は、真澄の気持ちが知りたくて、それとなく散歩に誘ってみた。

「あ．．．はい」

\* \* \* \* \*

あの洋風庭園のブランコまで来た時、「一緒に座らないか？」と誘ってみた。

「はい．．．じゃあ．．．」

2人でブランコに腰かけた。

最近ずっと距離を置いていたので、並んで座ると互いの距離も近く、微かに肩が触れ合って、お互いに少し照れる。

「実はね．．．」

「はい？」

「真澄にまだ話してなかった事があるのだけれど．．．」

「何でしょう？」

「多分、覚えてないかもしれないけど、君がフラワーショップに務めてる頃、サングラスしてフラワーバスケットのアレンジを買いに来た人．．．。あれは私なんだ」

「えええっ？」

想像もしてなかった話しに真澄の目が点になった。

「君に好きな花は？って聞いたら、ロマンティッククレースって言うてたよ。ペンステモンの鉢植えをおまけにつけてくれたよ」

「あ．．．覚えてます。片思いの人に送るからって．．．」

「そうそう、それ。実は片思いのその人って君なんだ。本当は真澄にあの花をあげたかったんだ」

「ええっ。あの時から私の事を？」

そんな時からずっと思ってくれてたのですね。なんだか嬉しいです．．．

「今、嬉しいって言ってくれたの？」

嬉しくて目を輝かせる空也。

「実は、何で覚えていたかって言いますと、サングラスをして顔ははつきりは分からなかったけれど、背がスラッと高くて、さっそうと外車から降りて来て、センスの良い高級そうなスーツをさりげなく着て、すごく素敵で格好良い方だなんて．．．ちよつとドキツと時めいたと言うか．．．。あんな素敵な人からお花を貰える女性って、いいな．．．幸せだろうなあって憧れと言うか．．．そんな事を感じて覚えてました」

「それって好感度高いのかな？」

「はい．．．」

うつすらと頬を染めて真澄が含羞んだ。

「今は？」

「私．．．誰ともお付き合いした事もないし、あまり恋をした事もなく、自分の気持ちがよく分からなかったのですが．．．空也さんの事．．．」

「私の事．．．」

「わ．．．わかりません」

期待していたので、ガツクリと肩を落とす空也．．．。

「そ．．．つか」

その時、真澄がいきなりブランコから立ち上がりながら『好きですっ！』と言って、足早に石造りのガーデンハウスの方へと歩いていった。

「えっ？」

嬉しくて慌てて、真澄を追いかけて、後ろからふんわりと抱きしめた。

「好きになってくれたのかい？」

「はい．．．」

後ろ向きのまま含羞んで俯く真澄．．．。

「私の為に色々お力になって下さって．．．空也さんは優しい人です。」

辛い事が色々ありましたが、乗り越えられたのは空也さんが側にいたからだって私、気がつきました。

それに．．．」

「それに．．．？」

「こつこつ風に抱きしめられると、心がドキドキしてきます」

後ろ向きの真澄を自分の方に向かせて、空也が優しく微笑みかけた。

「今、私の心もドキドキ鼓動してるのが分かるかな？聞いてみて？」

真澄がそうつと空也の胸に耳を当てたら、激しく鼓動する音が聞えて来た。

「本当だ．．．」

お互いに愛おしい瞳で見つめ合い、優しく唇を重ね合わせた。

(第10話に続く)

## 第10話 秘密のガーデンハウス

洋風庭園で暫く2人は熱い口づけを交わし、それからゆっくりと唇を離すと、そのまま抱き合いながら互いに無言で愛おしげに、熱い眼差しで暫く見つめ合った……。

「好きって思ってくれるんなら、私の妻になっってくれるかい？」

「本当に私でもいいのでしょうか？ 貧しい暮らしをしてましたし、何も誇れるものありませんし……。どうして私なのか……。」

「いいんだ……。そのままの君で……。全部含めてそんな君が好きなんだ……。」

「嬉しいです。でも……。私、犯罪者の娘なのですよ？あの工藤の……。父とは思ってませんが、私の体の中にはあの卑劣な男の血が流れてるのですよ？ 空也さんの家名に傷がつかないかと心配で……。」

「その事は気にしなくても大丈夫だよ。後で調べさせたら、真澄とは血が繋がってない事が分かったよ。」

「えっ？」

「真澄のお母さんには、結婚を約束した人が居たんだ。その当時は芸大の画学生で……。芹沢真澄せじざわ ますみと言う人で、今は結構有名な画家なんだが……。どうやらその人が、本当の父親のようなんだ……。

真澄のお母さんは、工藤の手にかかった時、お腹には真澄がいたん

だ．．．。

真澄の命を守ろうと、あえて工藤の子と言う事にして、育てたのだと思うよ。

工藤の毒牙に掛かって、お母さんは愛する人から自分から去って行ったのだと思う．．．。

多分真澄の父である芹沢さんは、真澄のお母さんが自分の子を身ごもっていた事を知らなかったのではないかなと思う．．．。

ずっとイタリアで活躍してる人だから、なかなか簡単には会えないかもしれないけれど、もし会いたければ、力を貸すよ」

「私．．．工藤の娘じゃなかったのですね」

「ああ。あんな無粋な男と天使のような君とでは全く繋がらないし、おかしいなとは思ってたんだ．．．」

「良かった．．．。芹沢真澄．．．私と同じ名前の人．．．どんな人だろう．．．」

真澄は頬を染めて目を輝かせた。

「実物には会った事がないけれど、面影が君によく似てて、男から見ても良い男って言うか．．．なかなか素敵な感じの人だよ」

「私．．．嬉しいです。工藤が父親だなんて．．．絶えられないくらい嫌でした。心の黒雲が取り払われたような気持ちです。いつか芹沢さんに、会ってみたいな．．．」

「君が工藤の娘なんてありえないよ！！ あんな奴．．．。だから．．．もうなにも問題ないし心配事も消えたかな？私と結婚してくれるかい？」

「はい．．．」。

ふつつか者ですが、よろしくお願いします。」

「私の方こそ物凄く愚か者で、真澄を傷つけてばかりで、ダメ夫になるかもしれないけれど．．．。真澄の事をすごく愛してるし、もう傷つける事をしないし、大切に作るから．．．。ずっと側にいて欲しい．．．。」

「はい．．．私．．．空也さんの傍にずっといます」

2人で手を繋いで庭園の小道を歩き、石造りのガーデンハウスの前までやって来た。

そこは、石を積み重ねたような壁面に素焼きの洋風瓦で、南仏の田舎にありそうな可愛らしい建物だ。

両開きの洋風窓の下には重厚な黒の鋳物の美しいフォルムのロートアイアンの洒落たプランターボックスがついていて、美しく寄せ植えされた花とグリーンが枝垂れ風にゆらゆらと揺れている。

入り口扉は重厚な木製ドアにアイアンの洒落た取っ手がついている。

「このガーデンハウス．．．とっても素敵ですね。この場所にとっても似合っていて．．．私の好きな風景と言っか．．．好きな場所なんです」

「この家はね、母の趣味でこの場所に建てさせたものなんだ．．．」

「え．．．お母様の？」

「母はね、私が6歳の頃にここを出ていったんだ．．．」

「えっ？」

「花京院家は明治の動乱期から政商で財をなして来たのだが．．．今の主な事業の基盤は父が築いて、私が更に大きくしたんだ。

父は母を愛してたけど、感情表現が昔気質と言うかとても下手な人で、それに亭主関白でもあったし、母に対する思いやりの配慮が足りなかったんだな．．．。

やがて母は、恋人を作って家を出て行ってしまったんだ．．．私を捨てて．．．。

私は一人っ子で跡取りだし、もちろん連れていけなかっただろうけど．．．。母親とはそれっきりで．．．。

だから．．．愛する人に捨てられるのは誰よりも辛く感じてさ．．．。

真澄を泣かした時も、捨てられたって思い込んで、逆上してしまっただんだ．．．。あれは本当に申し訳なかったと、今でも後悔してるよ」

「そうだったのですか．．．凄く辛い目にあったのですね。あの時は私も悪かったから．．．車2台壊して、門壊して．．．。

あなたが正門を開けてくれなかったら激突して死んでましたし．．．。本当にごめんなさい．．．。

あの車すごくお高いですよね？」

「気にしないでいいよ。大した事じゃないしさ．．．」

「は．．．い」

「そうそう．．．このガーデンハウス、君にプレゼントするよ」

「ええっ？」

「ここの庭も、花の好きな真澄の好きなように変えて良いし．．．  
屋敷内や庭園も、真澄の好きなようにして良いから．．．」

「えっ．．．」

「だって、君はここの女主人になるんだからね．．．」

「はあ．．．」

そう言う事になるんだ．．．こんな豪華な屋敷やお庭．．．今まで  
私の住んでいた世界とはまるっきり別世界だわ．．．。

「ねえ．．．来て来て．．．君をビックリさせる事が．．．」

そう言つて空也がグイと真澄の手を引いて、ガーデンハウスの戸口  
を空けて中に招き入れた。

中に一步入つて真澄は物凄く驚いた．．．。

「あっ．．．これは．．．」

「ここ1ヶ月ばかり色々な事があつたから、君に話すのが遅くなつ  
てすまなかつた」

中には真澄がここに初めてやつて来る前に住んでいた、アパートの  
家財道具や私物が丸ごと綺麗に整理されて置かれていた。

「私．．．工藤に全部処分されちゃったかと思つて．．．諦めてい  
たんです」

「処分されかかつたけれど捜し出して、取り返して来た．．．」

「嬉しい．．．アルバムとか思い出の物とか、両親の形見など失ってしまふのはすごく心残りで、てっきり処分されたのかと思ってすごく悲しかったから．．．あと机とベッドも．．．。唯一、母と北川の父と三人の家の頃から使っていた家具だから．．．。この机とベッドはね、小学校の頃から使っていて．．．両親が買ってくれたものだから．．．。」

「すごく大切に使っていたんだね。綺麗だし．．．。」

「アハツ．．．でも、お屋敷の家具に比べたら安物で恥ずかしいですけど．．．でもね、私の宝物なんです」

「ベッドに座ってもいいかな？」

「はい。どうぞ．．．。」

空也はゆっくりとベッドに座った。

「ここで真澄は小さな時から寝てたんだね．．．ちょっと感動と言っか．．．なんだろう．．．ふしきな気分でもあるな．．．。」

「空也さん．．．私の宝物を捜し出してくださってありがとうございます」

「うん。喜んでもらえて嬉しいよ」

「もう、とても嬉しいです。私のアルバム見ますか？」

それから2人は暫くこの家で真澄のアルバムを広げながらお喋りしたり、楽しい時間を過ごした。

(第11話に続く)



第10話 秘密のガーデンハウス（後書き）

蓼科の屋敷での2人のほのぼのした様子などを書いてみたくなり執筆致しました。（^^）

## 第11話 結婚その後・・・孤愁

・・・あれから蓼科高原の丘の上の教会で、結婚式を挙げ、私達は夫婦となり、半年が過ぎた・・・。

空也さんは、大手企業の経営者と言う立場・・・多忙な日も多く、時には数日間会えない淋しい時もあるけれど、私達は変わらずお互いを慈しみ、愛しい、語りあい、幸せに暮らしている。

ここ最近はこちらと仕事が立込んでいよう、淋しい時間を過ごしている・・・。

よっぽど仕事が忙しいのか、どんなに忙しくても数日したら蓼科に帰って来てくれたのに、ここ一週間戻って来ない・・・。更に、ここ2、3日は電話やメールも来ない・・・。

こんなに離れ離れになって、連絡も取り合わないのはちょっと珍しい・・・。

仕事が忙しい時は、六本木の家（高層マンション、ワンフロアー全）に空也さんは泊まり込んでいる。

本社ビルのすぐ隣にあり、セカンドハウスに使っている。

ちよつと気になって秘書に聞いたら、仕事はかなり立て込んで、寝る時間も無い程忙しいらしい・・・。

こちらから連絡を入れて、彼の仕事の邪魔になるような事をしてしまふのは申し訳ない・・・。  
ひたすら我慢している・・・。

彼の健康が心配だが、秘書の織部も付いてるし、彼の健康管理もしてくれてるし、きっと大丈夫よね・・・。

空也さんと結婚する以前は、私は毎日忙しく、身を粉にして働いていた。

今は何もやる事がない．．．最近暇をもて余していた。

「中川、ちよつと都内に出かけたいのですけれど．．．」

「かしこまりました。すぐにヘリのご用意を致します」

「付添の者は付けなくていいですから」

「かしこまりました」

中川とはこの屋敷の全てを任されている50代の執事だ。

昔は、母の訃報を耳に入れたり、工藤の魔の手から私を守ろうと、外出させてもらえなかったけれど、今はもちろん自由だ。

結婚してから私にも1台ヘリを買ってくれた．．．『これは君のだから、好き勝手に使っていていいよ。ショッピングとか都内に出掛けたい時には、本社屋上のヘリポートを使って良いから．．．』と言われ、頂いた時には、本当に驚いてしまったけれど．．．。

ここから、六本木の本社の屋上ヘリポート（3基収容可）に行き、そこから運転手付の車で都心に出かける事が多い。

「社に行くついでに可能ならば、ちよつと空也さんの様子を見てみよう．．．」

ここから順調に飛ばば1時間30分ぐらいで到着。  
空也さんはいわゆる遠距離通勤だ。

そこまでしても、この場所が好きなようだ。

天候不良の時は、向こう（六本木）の家に泊まる事もある。

また、その可能性の多い日も前もって向こうの家に泊まる事がある。

「今日は私も向こうの家に泊まってこようかしら．．．」

本社ビルすぐ近くの高層マンション（セカンドハウス）は、最上階ワンフロアー全てが住居．．．とても豪華で、とてつもなく広く、部屋数も多い。

普段の本宅は、蓼科だが、私も時々セカンドハウスに泊まる事があるし、私の部屋ももちろんある。

「そうしよう．．．」

私はバッグから携帯をとり出した。

「あ．．．中川？ 今日六本木宅に泊まりますから．．．。はい。後の事は頼みます。はい、じゃあ．．．」

\* \* \* \* \*

六本木本社ビル屋上に付いて、秘書に聞いたら空也さんは社の方には居なかった。

「マンションの方に寄って、こちらの家の執事、柴崎に空也さんの様子を聞いてみよう．．．」

本社から歩いて10分程の所にマンションがある。

車で送ると言われたが、このぐらいの距離は歩けるし、そうしたいので断った。

マンションエントランスまで来た所で空也さんの外車を見つけた。自分で運転する時には、ブルーのBMWだ．．．。

「あ．．．空也さん」

声をかけようとした時だった、空也さんの車に駆け寄る女性．．．。年は30歳前後ぐらい．．．。知的な感じでナイスバディで、マロンブラウンのウェーブのかかったロングヘアが素敵．．．。

「だれかしら？」

暫く親しそうに話してから、その女性が助手席に座って車は出ていった。

物凄くシヨックだった．．．。

「でも、ただの仕事関係の人かもしれないし．．．。そうだわきつとそう．．．。」

その日はいくら待っていても、彼は戻って来なかった．．．。

いったい何処に泊まったの？何処にいるの？

心の中がモヤモヤ．．．淋しい気持ちだった．．．。

\* \* \* \* \*

翌朝、気を紛らわせようと、あてもなく一人でブラブラとしてみたくなった。

「柴崎、ちょっと買い物に出掛けて来ます。電車で行くから、車の用意は要りません。」

それから帰りは夕方ぐらいになると思います」

「はい。かしこまりました」

やる事もないし、昔お世話になった花屋さんでも寄ってみようかなとふいに思った。

空也さんが渡す人も居ない架空の恋人の花カゴを買い求めたあの店だ。。。

花屋の店長は、私が結婚した事を知らない。。。

事情が事情だったから、何も言わないでただ一身上の都合でと言う理由で辞めた。

またあの花屋さんに務めたいな。。。

忙しかったけど充実してて楽しかった。。。

恵比寿の駅側のビルの一階のフラワーショップ。

「わあ。。。。なつかしいな。。。。店長だ。。。」

「あれ？ 真澄ちゃん？」

店先の鉢植えを手入れしていた店長がこっちに気がついた。

店長は空也さんより少し若い32歳、独身、身長は空也さんより少し低いが（と言っても、空也さんが186センチと大きいから。。。

。店長は176センチぐらいかな？）、なかなか素敵な人だ。

とっても優しい顔立ちで、サラサラのメンズショートヘアに、彫りの深い西洋人っぽい顔、ちょっと石膏のデッサン人形に似てるって感じがする。

とっても頼れる優しいお兄さんって感じ。。。。

「こんにちは、お久しぶりです」

「なんか雰囲気変わったね。綺麗になったよ」

「えーそうですか？」

「急に辞めちゃってどうしたのかと思ったけど、元気そうでしたよ」

「あの時は急に辞める事になって、御迷惑おかけしてすみませんでした」

「真澄ちゃんがやめてから大変でさ、戻る気ない？」

「え．．．。また仕事始めたいのですが．．．。主人に相談しないと．．．」

「えーっ。結婚したの？ 寿退社？」

「そう言うわけでもないのですが．．．」

「結婚式に呼んでくれないし、冷たいなあ」

「いえいえ．．．。あの時は結婚するから辞めたんじゃない．．．。それに、地味婚ですし．．．」

「そうなの？ で、旦那さんはどんな人？」

「うーん。自営業してて、眼光鋭くて一見恐そうですが、とても優しい人ですよ」

「いいねえ。新婚さんは．．．」

「っこり笑う店長の顔は、おひさまのようだ。」

「もう店長さんだったら・・・新婚って程でもないですよー」

その時お客さんが立て続けに入ってきた。

「バイトの子、急に辞めちゃってさ、もう忙しくて・・・。ちょっとごめんね」

「あ・・・はい」

大変そうな店長を見て、急に閃いた。

「店長、今日暇ですし、お手伝いしましょうか？」

「えーいいいの？ 凄く助かるよ。頼むよ。エプロンはスタッフルームにあるからさ適当に使って」

「はい」

私はスタッフルームに行つて、執事 柴崎に電話を入れた。

「真澄ですが今日は帰宅は夜9時過ぎると思うので、はい、宜しく願います」

まるで水を得た魚のように嬉しかった・・・。

閉店後、後片づけをして、店長と近くのお店に食事に行く事になった。

「いやあ今日は助かったよ・・・」

「もし良かったら、暫くお手伝いしましょうか？」

「ええ!!!いいの？」

「実は結婚したら、暇を持て余してて、何かやりたいなって思ってたんです」

「淒く助かるよ」

「どうぞよろしくお願いします」

「それはこっちのセリフ。よろしくお願いするね」

「はい!!」

店長と積る話で盛り上がり、六本木についたのは夜10時を回っていた。

「遅くなっちゃった・・・」

専用エレベーターで最上階に行き、大きな玄関扉を開けると、大理石の広い20畳ほどのエントランス・・・。重厚感溢れる調度品の数々・・・。大きなシャンデリア・・・。

「ただいま戻りました」

「奥様、お待ちしてました」  
執事の柴崎が出迎える。

「ご主人様がお待ちです」

「真澄!!何やってたんだ、こんな時間まで。飲んだのか?」  
久し振りの空也さん・・・。ちよっとイラ付いた顔だ・・・。

何故だかあの女性の顔がチラ付く・・・。

(第12話に続く)

## 第12話 心の距離感

。久し振りに会えたのに、いきなり怒られて気持ちが悪くなる。．．

「遅くなって、ごめんなさい。今日も空也さんは帰ってこないのかなと思つてて．．．」

昔務めてた花屋さんに行つてみたら、アルバイトが急に辞めて店長さんが困っていたので、手伝ってました。暫くそこで働こうかなと思つてます」

「えっ。どう言う事なんだそれは．．．」  
目が点の空也。

「だって、やることなくて．．．」

「でも、手は荒れるし、社長夫人が花屋でバイトなんて変でしょう．．．」

不満そうな顔の空也。

「やらせてください」

「うーん」

快く返事してくれない空也。

「で、その店長と飲んだのか？」

「食事して、ワインを少し頂いただけです」

「せっかく久し振りだから、一緒に食事でもと思つて待っていたの

に．．．」

「明日から花屋でバイトしますので．．．」

「もう決めちゃったのか．．．」

「はい」

不満そうな顔の空也．．．。

「じゃあ、仕事忙しいから先に寝させてもらおうよ」

「あ．．．お疲れ様です」

久しぶりにあったのに、会話はこれだけか．．．。ちよっと切ない気持ちになった。

最近の空也さんの話し方、最近トゲがあるって言うか．．．冷たいって言うか．．．。

でも、仕事が忙しくてきつと気が立っているのよね．．．。

仕事も忙しいし、ゆっくり寝かせてあげようと、真澄はゲストルームのベッドルームを使う事にした。

それに、あの女性の事が気になって、なんだかちよっと距離感を感じてしまった．．．。

朝起きたら空也さんはもう仕事に行って居なかった。

まだ6時半なのに．．．こんなに早く？

「本当に忙しいのね．．．」

真澄も急いで支度をして、お店に向った。

「おはようございます」

「あ．．．おはよう！ 今日から宜しく頼むね」  
相変わらず、お日様の笑顔の店長．．．。

久し振りの花屋．．．初めはしくじったり、戸惑ったりするかなと思っただけ、体が覚えてるのか自然に動く．．．。  
それにずっと働いていたお店だし．．．。

閉店は夜7時半．．．。  
それから後片づけをしたり、色々な所用を終えて、仕事が終わるのは8時半から9時．．．。

「店長、今日はお疲れ様でした」

「あ．．．今日はどうもありがとう。気をつけて帰ってね」

「はい。失礼します」

自宅マンションまでは電車で2駅．．．。  
比較的に近い．．．。

「でも、もう9時半か．．．」

ここ最近、いつもへりか運転手付の車だったから、ギユウギユウ詰めの電車に乗るのも、道路を歩くのも、働くのも何でも新鮮だ。それに、いつも自然豊かな蓼科だから久し振りにこう言った賑やかな都会が懐かしい気分。  
気持ちガクガクする．．．。

「ただいま戻りました。」

「奥様お帰りなさいませ。ご主人様がお待ちです」  
執事の顔がちよつとおどおどしてる．．．。  
空也さん怒りモード？

リビングに行くと、ソファーにドカッと空也さんが座ってる。

「ただいま戻りました」

「遅い！！ 何時だと思ってるの？」

「遅くなつてすみません。仕事を終えてすぐに戻って来たのですが．．．」

出た！空也さんのこの顔は実に怖い．．．。

「いつもこんな時間にまでなるのなら、仕事はやめなさい」

遅くなつて悪い事をしたとは思ったけれど、命令口調で言われて、ちよつとカチンと来た。

「嫌です！！ やめたくありません」

「．．．．．」  
反抗的な私の返事に益々鬼の形相の空也さん。  
ギロリ！と睨まれて、身がすくむ。

「じ・じゃあ、仕事5時までにしてもらって、もう少し早く戻って来ます」

あの目に睨まれたら、へビに睨まれたカエル状態．．．。

「……………」

暫く無言で睨みつけられていたが、諦めの顔に替わった。

「勝手にしなさい!!」

「ありがとうございます」

その後はなんだか気まずい空気が漂って、なんだか側にいるのが息苦しい気持ちになった。

気まずくて今日もゲストルームで寝る事にした。

いつからこんな風にお互いの心がすれ違ってしまったのだろうか……。

ちよつと前まで、1分1秒でも空也さんの側にいたいって思ってたのに。

今はなんだか息苦しい……。

本当は空也さんの腕の中で眠りたいのに……。

(第13話に続く)

### 第13話 甘い夜と天国から地獄

何だか空也さんと歯車がズレ始めてきたと言うか．．．噛み合わなくて、淋しいと思った。

家庭内別居の仮面夫婦かな？ まだ結婚半年なのに．．．。

眠れなくて何度もゴロゴロ寝返りをうっていたが、そのうちウトウトし始めた時の事だった。

パタリと軽くドアの開け閉めする音がして、ベッドのきしむ音がして、マットレスが沈み、誰かがベッドに入って来て、横向きに寝ていたら、後ろからスーツと手が伸びて優しく抱きしめられる。

「真澄．．．」

「空也さん．．．？」

久し振りのあったかいぬくもり．．．。

真澄がくるりと空也の方を向くと、真澄の上に覆いかぶさってきて、優しくくちづけをしてきた。

言葉を交わさなくても、お互いにどうしたいのか？ 阿吽の呼吸で伝わる．．．。

空也の顔はさっきの恐ろしい顔ではなく、今は優しい．．．。熱い眼差しで私を見つめる。

お互いに暫く熱い眼差しで見つめあって、もう一度深く口づけた。

男らしい広い肩幅と筋肉質で引き締まった腕．．．自分とは違う男

らしい大きな手．．．。

厚い胸板、肌を寄せ合って伝わってくる体温．．．。

コロンと彼の臭いが溶け合って、彼らしい雄々しく包み込むような．  
．そして癒されるような男らしい良い香りが真澄を包み込む。

．．．ああ空也さんだ．．．。

真澄は久し振りに、彼が自分のすぐ側に居ると実感できた。

\* \* \* \* \*

甘美な誘いが通り過ぎた後も、お互いに余韻を楽しむように、生まれたまの姿で抱きあう二人．．．。

「真澄．．．愛してる」

「嬉しい．．．。最近淋しかったから．．．」

「そう思ってくれたの？」

真澄は 最近、別の寝室に行っちゃうから、凄く不安で淋しかったんだよ。昨日も寝室に誘ってみたのに、別の部屋で寝ちゃうし．．．淋しかったよ」

「ええっ？そうだったの？」

「先に寝るよと言うのは、真澄もおいでって言うメッセージだったのに．．．」

「まあ、仕事がとても忙しそうだから、疲れているのかなって思って、ゆっくり寝かせてあげようと思ってただけなのに．．．」

「気を使ってくれてたの？」

「ええ。だって蓼科に戻って来ないし、連絡もくれないし、それぐ  
らいの忙しさだったのでしょうか？」

「ごめん。今回は結構厳しい状況で……。もう少し時間がかかり  
そうなんだ」

「私も我が儘言って、ごめんなさい。」

「あなたがいないと淋しくて、時間を持って余してしまつて、淋しく  
て退屈な時間を何かして気を紛らわせたくて……」

「そうだったのか……。分かつたよ。でも、夕方には帰つて来  
れるようにしてくれよ。淋しいじゃないか」

「分かりました」

\* \* \* \* \*

翌日花屋に行つて驚愕した……。

シャッターが閉まつていて、シャッターに張り紙が……。

「閉店のお詫びとお知らせ……。」

フラワーショップ グループ経営破綻はたんとなり、営業不能状態に  
陥りました。

長らくのご愛用誠にありがとうございました」

店の中に入ると店長が。情報収集など電話で、あくせくしている状  
態だった。

「て．．．店長．．．」

「真澄ちゃん、こんな事になって申し訳ない。本社に問いあわせしたら、社長が夜逃げして蒸発しちゃって．．．。給料も払ってもらえない状況に．．．。俺もどうしていいか、もう頭の中がパニックで．．．。」

「それは大変ですね．．．。私の事は気にしないでください。大して働いてませんし、以前、ずっとお世話になったのに急に辞めたりしましたし．．．。そのお詫びと言うかご恩返しのもりですから．．．。」

「悪いね。また何か情報が入ったら連絡するからね」

「私の事は後回しでいいですからね。気にしないでくださいね。何かお手伝いする事があつたら、遠慮なさらずに言ってくださいね」

「本当にありがとう．．．。」

私は店を後にして、しょんぼりしながらマンションに戻って来た。

空也さんは、今日はずっと会社にいるそうなので、お弁当でも作って届けてあげようかなとふと思いつき、手作りのお弁当を持って、社長室に向った。

第2秘書の女の子にお弁当を預けて帰ろうとした時だった．．．。内線電話が鳴って、その秘書が応対する。

「はい、はい、かしこまりました」

電話を切った後に、帰ろうとした私を秘書が引き止めた。

「奥様、今、来客の方が帰るそうですので、社長にお会い出来ますが・・・いかがされますか？」

「え・・・じゃあ・・・」

真澄は、社長室前の控室ソファーに腰かけて、待つ事にした。

なかなか社長室のドアは開かず、どうしたんだろう・・・と思っていた時だった・・・。

「吉沢君、お客様がお帰りだ!!」

ちよっとキツメの空也の声が社長室から聞こえた。

「は・・・はい」

こう言う時は、彼の機嫌が悪い時だ・・・。  
秘書が慌ててドアをノックして、入ろうとした時だった・・・。

「しつれいしま・・・」

その光景に秘書もビツクリして固まっていた。

扉が開いたので、私も見てしまった・・・。

社長デスクに座っている空也の膝の上に馬乗りになって、空也に接吻している。

胸は大きくはだけて、ブラが覗いてる・・・。

あの人は・・・。前に空也のBMWの助手席に座ったあの女性だった。

「し・・・しつれい致しました」

秘書が慌ててドアを閉める。

それと同時に、私は駆け出して出ていった……。

「お……奥様……」

どういうこと？ 何が起きたの？

何がなんだか分からない……。

行く所もなく、私はまた花屋に戻って来た。

「店長……」

「真澄ちゃん、色々情報が入って来たけど、夜逃げした社長だけ、花京院グループと企業提携の話があつたらしいけど、一方的に打ち切られたらしい……。で、破綻したらしいよ……」

「え……」

花京院グループって、うちの社じゃない……。

空也さんが故意にしたの？

それから町をさ迷った……。

昨日愛しあつたあれは何だったのだろう……。

彼に抱かれて、愛されてるって心満たし、安心しきっていたけど、  
全て幻だったの？

最近連絡もくれなくて、蓼科にも戻って来なかったのは、あの女性のせい？

携帯が鳴って出たら空也からだつた。

「空也さん、社長室で、女性と……。見てしまいました。」

花屋さんも潰れちゃいましたよ。あなたが企業提携打ち切つたから……。

私．．．空也さんが信じられなくなりました」

何か慌てた感じで話す声が聞こえて来るけど、何を言ってるのか頭の中に入らなくて来ないし、聞く気持ちも起きない．．．。

「私、蓼科に帰ります．．．」

そう言っただけ、電話を一方的に切り、電源を切った。

気がついていたら、自然と足が向いたのか、六本木のマンション近くまでやってきていた。

結局私の行く場所はここしかないの？ でも、帰りたくない気分．．．。

側にあつたベンチに座って、マンションとそのすぐ側にある本社ビルをぼんやり眺めていた．．．。

暫くぼんやり見ていたら、本社ビルの屋上からヘリが飛び立った．．．。

『空也さん？』

ビルの谷間に沈み始めた夕日が辺りを真っ赤に染めて、ヘリも赤金色に光っていて眩しい．．．。

本当に仕事が忙しいのね．．．。

真澄は携帯の電源を入れて、空也の携帯にメールを入れた。

『私、蓼科には戻りません。暫く一人にさせてください．．．』

送信し終わったら、データが全て消去．．．。

そのままベンチに携帯を置き去りにして、駅に向った。

懲らしめてやるうと思っただけ、プチ家出を決心した。

ちよつと気になる事があつた．．．実の父の事．．．。  
ずっとイタリアに住んでいたが、最近日本に戻って来て、今は京都で個展を開いているらしい．．．。

そうだ．．．京都に行こう．．．。

不意に思いついて、真澄は新幹線に乗って、京都に向つた．．．。

(第14話に続く)

## 第14話 プチ家出決行

夕方5時半過ぎの新幹線に乗って、京都駅に着いたのは午後8時を過ぎていた。

駅近くの案内所で今日空いているホテルを予約してもらって、京都駅すぐ側のホテルにチェックインした。

それから、ふらりと京都駅周辺を散策．．．。

途中お泊まりセットと着替えや下着類など必要な物を購入した。

空也からお小遣いは嫌と言っぐらい沢山貰ってるから、お金には困らない。だけど、今までは、殆ど使わなかった。

それは、いつもそんなに要りませんっていうぐらい、服や靴やバッグやアクセサリーや．．．車、真澄専用のへりまで、プレゼントされたり、買ってくれたりで、使う必要がなかったからだ。

仕事も辞めてしまったし、家の事は執事やメイドが全てやってくれるし、本当にやる事がなくて空也がいない時は退屈だった．．．。

考えたら、今日が一番使ってるかもしれない．．．。

私の事、心配しているかしら？それとも居なくなっって清々したって思ってるかしら？

もしかしたらあの人（女性）と．．．つまらない想像をして真澄はブルツと身震いを起した。

いいわ．．．どうせ、始まりは愛人としてあの家に連れて来られたような物だから．．．ダメになったら別れて一人でだって生きて生けるわ。

．．．本当はもう会いたくなって来てる．．．。  
だめだめ．．．そんな弱気な事を思っっては．．．。

今日社長室で見たあの光景．．．あれを思いだして、あの時の気持ち  
を忘れてはダメ！！

嫌な事は忘れて、今日は思いっきり楽しもう．．．。

「さあ、せっかくの京都だもの．．．。美味しい物でも食べよう．  
」。

京都の町は賑やかで、趣があつて素敵．．．。  
道行く人が皆幸せそうに見えた。

京都らしい物を食べようと、先斗町にある有名な京懐石のお店に行  
った。

瓢箪型に積み重なったお重の中を開けると、焼き物や、煮物、混ぜ  
ご飯．．．。色とりどりに綺麗に盛り付けられて、上品な薄味で美  
味しい．．．。

それからあちこちフラフラ歩き回って、ホテル戻ったのは12時過  
ぎていた．．．。

ルームカードキーなので、チェックアウトまでは自分で持ち歩きが  
出来るので、遅くなっても大丈夫！！

ちよつと自棄のような気持ちにもなつて来て、プチ家出を楽しもう  
と気持ちが切り替わってきた。

フロントを通り過ぎてエレベーターに乗り込もうとした時だった．  
。

「あ．．．花京院様」

フロントの人に呼び止められた。

「はい？」

「あの、後からお連れ様が来られて、部屋が変更されましたが．．．」

「ええっ」

お連れ様?!物凄く嫌な予感がした。

フロントでルームキーを変更された。

私が予約したのは10階のシングルルーム．．．。

それが最上階の12階のスイートルームに変更されてた。

こんな事する人は空也さん意外考えられない．．．。

12階に着いて、恐る恐る部屋の扉を開けた。

「真澄ーっ!!」

扉を開けた途端、空也が飛びついてきた。

「く．．．空也さん!!」

私を探し出して、追いかけてきてくれたの?

内心嬉しかったけど、怒ってますって顔をして、拗ねることにして、  
プイと顔を背けた。

「ごめん」

「離して下さい。私は怒ってるんです」

「君は誤解してる．．．。話しあおう．．．。」

あの状況でどんな誤解がるのかしら?と冷めてきていた怒りがぶり返してきた。

「分かりました。どうぞ．．．言い訳してみてください」

不機嫌そうな顔をして、ドスン！とソファアームに座った。

真澄のこんな様子は初めて見たと、空也が驚きのような困ったような表情をした。

（第15話に続く）

## 第15話 雨降って地固まる？

ソファーにドスン！と座って、怒った顔の真澄にドギマギしながら困惑の空也……。  
恐る恐る、真澄の隣に腰かける。

真澄は非常に怒ってますと意思表示を現すように、「私にくつつくんじゃない！」と言わんばかりに腰をスライドさせて、空也から少し離れた。

「ま……真澄は誤解しているから……私の話しを最後まで聞いて欲しい……」

「分かりました。どうぞ思う存分言い訳してみてください」

『言い訳』と言うフレーズに、空也がピクリと肩をすくめた。

「ま……まず、花屋の親会社との企業提携の事だけだね。そういう話しは確かに向こう側から持ちかけられたが、即お断りしたんだ。なぜなら、物凄い高額な負債を抱えてて、それを回収する能力もないし、そういう会社と関わりを持てば、うちの社に被害を被る事になり、社員達に負担を追わせなくてはいけない可能性が大きいし……」

社はボランティアじゃないし、私には沢山の社員とその家族の生活を守らなくてはいけない、義務と責任があるからね。分かるかい？」

「はい」

確かにそうだ……。何も言えなかった。

「分かってくれるか？」

「はい」

ちよつと、状況が不利になってきた気持ちの真澄……。

「それにね、花屋が倒産したのは、社長が知識も無いのに先物取引に手を出して、社の金に手を付けてしまった事が原因だからなんだ。そう言った物に手を出さずに今まで通り、地道に花関係の仕事にのみ専念してれば、こう言った悲劇は起きなかった……。だから、倒産したのは私の責任はないよ」

「はい」

彼の言っている事は正論だ……。私は甘えすぎていたのかもしれない。

「理解出来たかな？」

「分かりました。」

「よし」

そう言つて、空也から、いい子いい子のように頭をなでられた。

『私、子供じゃないんですけれど……。』

でもちよつと嬉しいような……。彼が凄く頼もしい素敵な大人に見えた。

「続いて、社長室のあの女性の件だけど……」

真澄は身を乗り出して、空也を睨みつける。

『ちよつと怖いな……。』と空也が苦笑した。

「あれは、ライバル社が刺客を送り込んできた……」

「なんですかそれは．．．」

「彼女はライバル社の社長秘書だが、実は社長の女なんだ。で、最近業績が悪化して、わが社と提携を結びたく、彼女を俺に接近させてきた．．．」

「うちはお断りして、お引き取り願おうとしたら、彼女が胸をはだけさせていきなり迫ってきた．．．。それだけの事だよ．．．」

「何なんですかそれは．．．。私、マンシヨンの前でもあの人がある。あなたの車の助手席に乗るのを見ましたよ」

「ああ．．．あれ？ あれは俺がマンシヨンの駐車場から出てきたところを待ち伏せされて、声をかけられた。」

その時は、そんな女性だったとは分からなかったから、駅まで送ってあげた。それだけだよ」

「なんだかスッキリしない感じです」

「悲しいな．．．信じてくれないの？ 万が一の為に、社長室に防犯カメラ設置しておいたから、後で確認してみる？ 音声もバッチリ入ってるよ」

「そこまでしなくてもいいです」

「この事も納得してくれただ？」

「まあ．．．大体．．．」

「じゃあ結局全て私の誤解だったって事？」

ちょっとスッキリしない気持ちもあるけれど、怒っているのも疲れ  
るし、彼があんな風に社で女性と情事を行ったり、裏切るようには  
見えなかった。

「大体なの？」

「分かりました」

「じゃあもう怒ってない？許してくれる？」

「はい」

空也がにじり寄ってきて、ギュツと抱きしめてきた。

「もう・・・携帯は捨てるし、家出するし・・・悪い子だな・・・」

「だって・・・。物凄く傷ついて、ショック受けちゃったんですも  
の」

「もう傷は癒えたかな？」

真澄はコックリうなづいた。

「でもどうやって私の居場所がわかったのですか？」

「私から逃げられないように、真澄にはICチップが埋め込んであ  
るんだ」

「ええええーっ」

驚いて両手で胸を隠すようなポーズをとって、不審そうな顔で空也

を見た。

「ウソウソ．．．カード利用状況をWebで見て、京都行の新幹線のチケットを買ってる事が分ったから．．．。すぐに追いかけて新幹線に飛び乗ったんだ。」

で、私が新幹線に乗っている間に、部下に駅周辺のホテルを捜させて．．．。『花京院』名でチェックインした若い女の子がいる事を突き止めたんだ。『花京院』なんて名字、珍しくて滅多にないからね．．．。」

「名前を偽って泊まれば良かったかしら？」  
意地悪そうな顔で茶化す真澄。

「おいおい．．．もう家出はやめてくれよ。見て．．．目が赤いと思わないか？」

「そう言えば、充血してるみたいですね．．．どうしたのですか？」

「新幹線の中で、真澄の届けてくれた弁当開いて食べたんだ。胸がジーンとして涙が出てきてしまったんだよ。」

「えっ。泣いちゃったのですか？」

「前にも言っただろう．．．。愛する人に去られるのが一番辛いって．．．。」

そうだった．．．。  
6歳の時にお母さんに去られてから、傷つきやすくなってるんだよね．．．。

「ごめんなさい」

「今度からは家出する前に、まずは良く話しあおうよ、私達は夫婦なんだからね」

「はい」

他の人には気丈で雄々しい空也さんも、私の前では違うんだって思った。

「でも、何で京都に来たのかな？」

「お父さんかもしれない人の個展が行われてるらしくて、それが見たかったの」

「芹沢 真澄 さんの？」

「はい．．．」

「日本に戻って来ている情報が耳に入ったから、私も合わせてあげたいって思っていたんだよ」

「シヨンボリしてる時、ふとお父さんかもしれない人に会ってみたいなーって思ってた．．．」

「私の方も仕事が片付いたし、付き合おうよ．．．」

「わあ。本当ですか？」

「ああ．．．」

「嬉しい・・・」

「それから、明日ここをチェックアウトして、嵐山に祖父の残した家があるからさ、そこに泊まろう・・・」

「まあ、こんな所に別荘が？本当に花京院家はすごいですね」

「それに・・・。家出した罰として、お仕置きしなくちゃいけないしな・・・」

「ええーっ。なんですかそれは？」

「真澄はさつき、一人で美味しい京懐石の店に行って、お弁当を食べたね？」

意地悪そうな恨みがましい目で見える空也。

「いやだー。そんな所までチェック入れてたの？」

「自分一人だけご馳走食べて・・・ずるいじゃないか・・・」

「もっつ！！私の事いじめたら離婚しますよ！！」

「あははは・・・もう懲りたから、もっともっと大事にするよ」

「いいんです。忙しいのにこれ以上私に気を使わせて空也さんが倒れたら大変だから・・・。そのままでもいいですよ。私もすごく悪かったですから・・・」

「もう仲直りだよね？」

「はい」

(第16話に続く)

## 第16話 父と娘

翌日から空也の祖父が残した嵐山の別邸に泊まる事になった。

嵐山の別邸は純和風で、庭も手入れが行き届いて大変素晴らしい。

「なんて趣のある佇まいとお庭なのかしら．．．」

それに露天風呂付きの温泉がある。

「空也さんって本当に生まれながらのセレブなのね」

40代半ばの夫婦が離れの方に住み込みで、この家を管理している。ご主人は腕のいい板前さんでもあり、料理も美味しい．．．。それから通いで、30代半ばぐらいで若そうだけれど、腕の良さそうな頑固一徹な感じの庭師が、広大な庭の手入れをしてる。

温泉にも入って、おいしい料理を沢山堪能し、久しぶりに夫婦水入らずでゆったりと過ごした。

「空也さん、ホテルよりもくつろげるし、とても素晴らしい所ですね」

「だろう．．．。庭をみてごらん．．．」

「わあ、すごく綺麗．．．」

「私のアイデアで、夜はライトアップできるようにしたんだ。

それも庭の雰囲気壊してはいけないから、小さな石灯籠を転々と

置いて、ロウソクの明かり風のライトをつけてみた」

「本当に、ロウソクのほんのりした明かりが灯ってる様な幻想的なお庭ですね。空也さんってセンスいいですね」

「少しは見直してくれた？」

「沢山．．．いつも素敵だなって見惚れてますよ」

「それは嬉しいね。そうそう．．．明日、芹沢氏の個展に本人が来るそうなんだ。ぜひ行ってみよう」

「すぐドキドキしますけど、実物がどんな方なのか、とても気になるります。すぐ会いたいです」

「うん。私もとても会ってみたいよ。愛する真澄の実のお父さんかもしれないんだから．．．」

「空也さん．．．」

\* \* \* \* \*

翌日、空也と真澄は、父かもしれない芹沢真澄の個展に出かけた。

個展の開かれているギャラリーは。京の古い町屋の建物を内部改装した物で、とても味わいがあって素敵な場所だ．．．。

そして芹沢真澄は、初期の頃は油絵画家としてイタリアを拠点として活躍していたが、その後、リトグラフなど手がけるようになって、日本に戻ってきてからは、懐かしい昔の日本を思い起こさせる様な

場所を木版画を使って表現した作品を次々と発表し、人気を泊して  
る。

。ここ最近、着物のデザインも手がけるようになってきたようだ。

今回の町屋ギャラリーでの作品は、京の町並みを木版画で表現した  
作品が多い。

中には手描き友禅で着物地の様な古典柄を描き、素敵額に入れた  
作品や、初期のように油絵で描いた物などもある。

「わぁ．．．どれも素晴らしくて、心が洗われるような優しい作品  
ですね」

真澄が目を輝かせて、作品ひとつひとつに魅入る。

「うーん。芹沢さんは素晴らしい感性を持った人なんだね。本当に  
見事だな」

美術品などにも目利きのする空也が、感嘆のため息を漏らす。

パンフレットに載っていた芹沢氏は、芸術家っぽい妥協しない厳し  
さのあるような、一見、人を寄せ付けないような雰囲気があるが、  
目は優しく澄んでいて、青年のような純粹さの漂う美しさがあった。  
何処か目元が真澄に似てる。

「うーん、やっぱり真澄って、芹沢さんに似てるな．．．」  
パンフレットの写真を繁々見て、空也がポツリと言う。

「今さらもしかしたら、お父さんかもしれまんなんて言えないし、  
遠くからそつと見るだけでいいんです。

それだけで満足．．．。

私には愛してくれて可愛がってくれた、育てのお父さんもいますし  
．．．」

「いいのか？それで．．．」

「はい」

作品集の画集販売の所に芹沢氏がいた。

「おいで．．．」

空也が真澄の手を引いて、芹沢氏の画集を全集買い求めた。

「どうもありがとうございます」

芹沢氏がにこやかに挨拶する。

「家内が芹沢さんの個展にどうしても行きたいと、こうやって東京から見に来ました。

どの作品もとても素晴らしくて、感動致しました」

「それはありがとうございます。とても嬉しく思います」

にっこり笑う顔はとても人なつこい感じの芹沢氏だ。

「家内が芹沢さんのファンになりました、もし宜しかったら握手してやってくれませんか？」

空也が真澄を引っ張って、芹沢氏に紹介した。

「はい喜んで」

芹沢氏は、真澄の手を両手で包み込んで、優しくにっこり笑った。

「私の作品を気に入って下さって、とても嬉しいです。ありがとうございます」

「本当に素晴らしくて、心が温まるような癒される気持ちになりました」

真澄が頬をピンクに染めて、嬉しそうに言った。

「あの．．．油絵の女性像ですが．．．」  
空也が話しを切り出す。

「はい？」

「家内の母親に良く似てて驚きました」

芹沢氏が目を丸くした。

「ああ．．．お恥ずかしいのですが、あの絵は結構古い物なのですが、私の愛した大切な人の肖像画なんですよ」

「その人って、もしかしたら．．．美咲さんって言いませんか？」  
空也が、芹沢氏の反応を探るように聞いた。

「ええっ。なんでそれを？」  
とても驚く芹沢氏。

「うちの家内は、その人の娘なんです」

啞然として驚く芹沢氏。

「えええっ。」

「妻の名前は真澄って言います」

口をぽかんとさせて、そのまま固まってしまった芹沢氏。

「あの．．．もし少しでもお時間ありましたら、お話し出来ませんか？」

それからギャラリー閉館後、京懐石料理のお店の個室で待ち合わせして、会う事になった。

空也と真澄は少し早めに店に入って、芹沢氏が訪れるのを待った。

「空也さん、物凄くドキドキして心臓が破裂しそう．．．」

「大丈夫．．．優しい人じゃないか．．．芹沢さんは今でも真澄のお母さんの事思ってるんだね」

「とても嬉しいです。母の事、そんな風にずっと思い続けてくれていたなんて．．．」

芹沢氏は、約束の時間少し前にやってきた。

ガラリと店の女中が個室の戸を開けて、芹沢氏を部屋に通した。

「あ．．．先程は、ギャラリーにお越し下さりましてありがとうございます。ありがとうございました。それから今日はお招きくださり、ありがとうございます。ます」

空也と真澄が立ち上がり、挨拶をする。

「こちらこそ、突然お呼びだてしてお越しいたごき、すみません。でした。それからありがとうございます。」

さあ、どうぞおかけください」

それから、空也が今までの経緯などを順を追って話した。

芹沢氏は大変驚いたが、真澄を温かい優しい目で見つめてこう言った。。。

「もし、あなたが私の娘だとしたら、こんなに嬉しい事はありません。

私が生涯愛した人は、美咲ただ1人。。。

もちろん何度も忘れようとした事もありましたが、どうしても忘れる事が出来なくて。。。

急に別れを切り出された時には恨む気持ちもありましたが、今は彼女と過ごした時間が私にとってかけがえのない美しい思い出であり、宝物なんです。それが私の作品の原動力でもあります」

「もし差し障りがなければ、DNA鑑定と言う方法も。。。」

空也が芹沢氏に鑑定を持ちかけた。

空也も殆ど間違えはないだろうと感じていたが、親子鑑定に出したほうが、真澄も芹沢氏も気持ち的にスッキリ出来るのではないかと思っただからだ。。。

「美咲が私の名前を付けてくれた事で、娘に間違えないって感じます。。。でも、ハッキリさせて真実を知ったほうが、真澄さんも気が晴れるかも知れませんね。協力させてください」

芹沢氏は快く許諾してくれ、DNA鑑定に出した。。。

そしてやはり、真澄は芹沢氏の娘だった。

それ以前に間違えはないと、それぞれの心に確信的な気持ちがあったが。。。

(第17話に続く)



## 第17話 幸せの彼方

暫くして、真澄はまた芹沢氏に会いに京都に出掛けた。

京都に住居を構えた芹沢氏の家は、西陣の町・大黒町にあり、古い町屋を改装して、住み心地の良い住居件アトリエにしたものだ。

「真澄ちゃん。よく来たね」

「お．．．お父さん．．．。って呼んでもいいのでしょうか？」

「もちろんだよ。家族も持てないで、生涯孤独で一生を終えるんだろうと思っていたのに、美咲そっくりなこんな素敵な娘がいてくれて嬉しいよ。」

父親らしい事をなにもしてあげられなくて、父と呼んでももらえるような資格もないかもしれないが、もし許してくれるのなら、父と思つて、そう呼んで欲しいよ。

それからこんなに素晴らしい娘に愛情込めて育てて下さった北川さん、そして命がけで守って生んでくれた美咲には本当に感謝しているんだ」

「私、嬉しいです。本当のお父さんが今、目の前にいてくれて．．．」

それから芹沢氏は、美しい和紙のたとう紙（着物の収納袋）の包みを大切そうに手に抱えて持って来て、真澄の前に置いて広げた。

「これはね、真澄にと思って私がデザインした、訪問着なのだが．．．」

。気に入って貰えるかどうか・・・」

芹沢氏ははにかみながら、たとう紙を開いて、着物を広げた。

「まあ・・・なんて美しい・・・」

それは、淡い薄萌黄色地に、古典花柄模様の美しい手描き友禅の着物だった・・・。

「この着物に合わせて、私がデザインして織ってもらった、西陣織の袋帯もあるんだが・・・」

「とても嬉しいです・・・。こんな素晴らしい贈り物を頂いて・・・。幸せで胸がいっぱいです」  
涙ぐみながら真澄は喜んだ。

芹沢氏はそれはそれは嬉しそうに、優しくにつこり微笑んだ・・・。

\* \* \* \* \*

それからまた蓼科に戻って来て、穏やかな日常の日々が続いている・・・。

真澄は、色々習い始めた。

仕事であくせく働く意外に時間の使い方を知らなかった真澄だが、芸術家の実の父や、色々な所作を心得て何でもできる空也を見習って、色々な事にチャレンジしてみたいと習い事を色々始めた。

お茶、生け花、着付け、ダンス、絵、ピアノ、乗馬・・・。

元々器用で凝り性な真澄は、どんどん吸収し、まるで飢えた動物のように、夢中でとても熱心だ。

それから、空也がすっかり真澄の手作り弁当を気に入ってしまって、毎日お弁当を会社に持っていく様になった。また家でも真澄の手料理が並ぶようになった。

あまり家庭料理に縁のなかった生活をしていた空也……。素朴な家庭料理にすっかり嵌ってしまった。

真澄はやる事が出来て嬉しくてしょうがない……。

それから花屋の店長だが、久し振りに蓼科に帰って来た翌日、庭を散策していた真澄は仰天した……。

「て……。店長……。なんでここに?!」

そうです。広大な庭のお手入れをするガーデナーとして、空也がやとったのだった。

お給料は前の店長時代よりも、はるかに高額で、実働時間も少ないし、住居の手配もしてくれて、労働条件は全然こちらの方が良い。

いきなり倒産となって、困っていた店長の事を気にかけていた空也が、ガーデナーとして働かないかと店長に話しを持ちかけたのだった。

真澄がずっとお世話になった恩人でもあるし、空也も気にかけていた……。

。 - - - 洋風庭園のブランコに腰かけて、お喋りに花が咲く2人……。

「空也さんって、こまやかな気配りも利くし、本当に素敵な旦那様ですね」

「よかった……。真澄がお世話になった店長の事は、気になってたからね。」

それに一生恨まれたらたまったもんじゃないし……。」

「もうっ！ 空也さんの事恨むだなんて……。」

私……実の父の事でも、本当に色々と力になってくださって、感謝の気持ちでいっぱいですよ」

「本当によかったよ……。真澄の嬉しい幸せな顔を見るのが、私の幸せであり、喜びだからね……。」

「空也さん……。私とっても幸せ……。あなたの奥さんになってよかったなあってしみじみ思います」

「嬉しいな……。最高に嬉しい言葉だよ。感激してる……。」

「あの見合いの席で恐い顔のあなたと出会った時には、絶望のような気持ちでしたのに……。  
こんな風に穏やかで幸せな日々を過ごすようになるとは思いませんでした。」

私、あなたで良かったです……。空也さんは私を幸せに導く為に、魔王の手からさらってくれた王子様ですね……。」

「王子様だなんて、嬉しいね。褒められすぎて、照れてしまうよ……。」

「これからもいっぱい私の事、愛してくださいね」

「ああ。もちろん……。」

-  
-  
-  
完  
-  
-  
-

## 第17話 幸せの彼方（後書き）

絶望への入り口だと思っている事でも、後々ふり返れば幸せへの扉  
だったりするのかも知れませぬね。

空也に囚われたと思っていた天使のような真澄・・・本当は、囚わ  
れた方は、初めて真澄を見た時に心を奪われた空也なのかもしれま  
せん・・・。

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5126t/>

---

囚われた天使

2011年6月1日02時13分発行